

4章 § 1の前半 代数と幾何の関係

担当:長谷川禎彦

2013/3/12

ヒルベルトの零点定理

- 多様体 V は, V 上で消える多項式からなるイデアルに関係付けられる

$$\mathbf{I}(V) = \{f \in k[x_1, \dots, x_n] : f(x) = 0 \text{ for } \forall x \in V\}$$

affine variety		ideal
V	\rightarrow	$\mathbf{I}(V)$

- 逆に, イデアルに対して, 多様体 V を定義出来る.

$$\mathbf{V}(I) = \{x \in k^n : f(x) = 0 \text{ for } \forall f \in I\}$$

ヒルベルトの零点定理

ヒルベルトの基底定理により, 任意のイデアル I は有限個の生成集合を持つ

$$\exists g_1, \dots, g_t \in I \rightarrow I = \langle g_1, \dots, g_t \rangle$$



$$\mathbf{V}(I) = \mathbf{V}(g_1, \dots, g_t)$$

ideal	\rightarrow	affine variety
I		$\mathbf{V}(I)$

ヒルベルトの零点定理

- イデアルと多様体は一対一にはなっていない
 - 異なるイデアルが同じ多様体にマップされることがある

$$f = x^2 - 1$$



例

$$(x + 1)(x^2 - 1)$$

イデアル $I_1 = \langle f \rangle \supsetneq \langle f^2 \rangle = I_2$

多様体 $V(I_1) = V(I_2) = \{1, -1\}$

- 代数的閉体でない場合は、もっと問題がある

(補足)代数的閉体

- 体 k が代数的閉体であるとは、一次以上の任意の k 係数一変数多項式が k 上に根を持つこと [wikipedia]

$$x^2 + x + 1 \in \mathbb{Z}[x]$$



$$x = -\frac{1}{2} + \frac{1}{2}\sqrt{3}i, -\frac{1}{2} - \frac{1}{2}\sqrt{3}i \notin \mathbb{Z}$$

\mathbb{Z} は代数的閉体ではない

代数的閉体でない場合 $\mathbb{R}[x]$

$$I_1 = \langle 1 \rangle = \mathbb{R}[x]$$

$$I_2 = \langle 1 + x^2 \rangle$$

$$I_3 = \langle 1 + x^2 + x^4 \rangle$$



$$\mathbf{V}(I_1) = \mathbf{V}(I_2) = \mathbf{V}(I_3) = \emptyset$$

- k が代数的閉体の場合は, 空な多様体を表すイデアルは一意に決まるか?



- 1変数, 多変数どちらの場合もYES

一変数の場合の証明

一変数 $k[x]$ では, 任意のイデアルは一つの多項式で生成される(1章 § 5の系4)

$$f \in k[x] \quad I = \langle f \rangle$$



$$V(I) = \{x \in k : f(x) = 0\}$$

k は代数的閉体なので, $V(I)$ が空集合になるには f は定数で無ければならない.

$$I = \langle 1 \rangle = k[x] \quad \square$$

定理1 弱形の零点定理 (*Nullstellensatz*)

定理 1 (弱形の零点定理) k を代数的閉体とし, $I \subset k[x_1, \dots, x_n]$ を $V(I) = \emptyset$ を満たすイデアルとする. このとき $I = k[x_1, \dots, x_n]$ である.

- 前のページは1変数の場合であったが, 多変数でも言えるということ

証明

イデアル I に定数 1 が含まれていることを示せば
良い

$$1 \in I$$

なぜなら

$$\langle 1 \rangle = k[x_1, \dots, x_n]$$

証明は帰納法. $n = 1$ の場合は既に示した.

$n-1$ で多項式環 $k[x_2, \dots, x_n]$ に対して成立して
いると仮定する. $V(I) = \emptyset$ を満たす任意のイデ
アルを考える. $I = \langle f_1, \dots, f_s \rangle \subset k[x_1, \dots, x_n]$

f_1 が定数関数でないと仮定する. その場合の全
次数は 1 以上である.

以下の変数変換を考える(係数 a は上手く選ぶとする)

$$\left. \begin{aligned} x_1 &= \tilde{x}_1 \\ x_2 &= \tilde{x}_2 + a_2 \tilde{x}_1 \\ &\vdots \\ x_n &= \tilde{x}_n + a_n \tilde{x}_1 \end{aligned} \right\} \text{座標変換(1)}$$

これを f_1 に代入すると,

$$\begin{aligned} f_1(x_1, \dots, x_n) &= f_1(\tilde{x}_1, \tilde{x}_2 + a_2 \tilde{x}_1, \dots, \tilde{x}_n + a_n \tilde{x}_1) \\ &= c(a_2, \dots, a_n) \tilde{x}_1^N + (\tilde{x}_1 \text{ に関して } N \text{ 次未満の式}) \end{aligned}$$

$c(a_2, \dots, a_n)$ は零関数ではない(演習3).

代数的閉体は無限体(演習4). 無限体であり

かつ零関数ではないので, $c(a_2, \dots, a_n) \neq 0$

となる a_2, \dots, a_n を選ぶことが出来る.

$c(a_2, \dots, a_n)$ をこのように選んで, 座標変換 (1) より, 多項式 $f \in k[x_1, \dots, x_n]$ が写された多項式を $\tilde{f} \in k[\tilde{x}_1, \dots, \tilde{x}_n]$ と表す. 集合 $\tilde{I} = \{\tilde{f} : f \in I\}$ はイデアルとなる (演習5).

変換元の方程式が解を持たないので, 変換後の方程式も解を持たない: $V(\tilde{I}) = \emptyset$

また, 変換は定数には影響を及ぼさないので

$$1 \in \tilde{I} \longrightarrow 1 \in I$$

以上より, $1 \in \tilde{I}$ を示せば十分.

$$\tilde{f}_1(\tilde{x}_1, \dots, \tilde{x}_n) = c(a_2, \dots, a_n)\tilde{x}_1^N + (\tilde{x}_1 \text{ に関して } N \text{ 次未満の式})$$

$c(a_2, \dots, a_n) \neq 0$ であるので、3章 § 2系4の拡張定理を用いるとことが可能. これにより、消去イデアルと射影が関連付けられる.

$$\text{射影 } \pi_1 : (x_1, x_2, \dots, x_n) \rightarrow (x_2, \dots, x_n)$$

$$\text{消去イデアル } \tilde{I}_1 = \tilde{I} \cap k[\tilde{x}_2, \dots, \tilde{x}_n]$$



$$\mathbf{V}(\tilde{I}_1) = \pi_1(\mathbf{V}(\tilde{I}))$$

ここは前提条件

$$\mathbf{V}(\tilde{I}_1) = \pi_1(\mathbf{V}(\tilde{I})) = \pi_1(\emptyset) = \emptyset$$

帰納法の仮定より, $n-1$ 変数の多項式環 $k[x_2, \dots, x_n]$ で結果が証明されているとしているので,

$$\mathbf{V}(\tilde{I}_1) = \emptyset \quad \longrightarrow \quad \tilde{I}_1 = \langle 1 \rangle = k[x_2, \dots, x_n]$$

$$1 \in \tilde{I}_1$$

一方で, \tilde{I}_1 は \tilde{I} の部分空間であるので

$$1 \in \tilde{I}_1 \in \tilde{I} \quad \square$$

整合性問題

- 以下の連立多項式が解を持つか

$$\begin{array}{rcl} f_1 & = & 0 \\ f_2 & = & 0 \\ & \vdots & \\ f_s & = & 0 \end{array} \quad \mathbb{C}^n$$

$$\mathbf{V}(f_1, \dots, f_s) = \emptyset$$

$$1 \in \langle f_1, \dots, f_s \rangle$$

任意の代数的閉体に適用可能

整合性問題

- 簡約グレブナ基底が $\{1\}$ の場合共通ゼロ点を持たない。そうでない場合はもつ。
- 代数的閉体でなくとも、片方向には正しい

イデアルと多様体

- イデアルと多様体の間には1対1対応はない

$$V(x) = V(x^2) = \{0\}$$

- 多項式とそのべき乗は同じ集合上で消えるから



- 異なるイデアルが同じ多様体を定めるのはこの場合に限る

– ヒルベルトのゼロ点定理

定理2 ヒルベルトの零点定理

定理 2 (ヒルベルトの零点定理) k を代数的閉体とする. 多項式 $f, f_1, \dots, f_s \in k[x_1, \dots, x_n]$ が $f \in \mathbf{I}(V(f_1, \dots, f_s))$ を満たすとする. このとき, ある整数 $m \geq 1$ が存在して

$$f^m \in \langle f_1, \dots, f_s \rangle$$

となる. 逆も成立する.

証明

多項式 $f_1, f_2, \dots, f_s \in k[x_1, \dots, x_n]$ の共通ゼロ点で消える多項式 f に対して, 整数 $m \geq 1$ と多項式 A_1, \dots, A_s で

$$f^m = \sum_{i=1}^s A_i f_i$$

を満たすものが存在することを示す必要がある.

そのために, イデアル

$$\tilde{I} = \langle f_1, \dots, f_s, 1 - yf \rangle \subset k[x_1, \dots, x_n, y]$$

を考える. まず以下を示す.

$$V(\tilde{I}) = \emptyset$$

これを示すために、 $(a_1, \dots, a_n, a_{n+1}) \in k^{n+1}$ をとると以下の2つの場合が考えられる。

1. (a_1, \dots, a_n) は f_1, \dots, f_s の共通ゼロ点である

2. (a_1, \dots, a_n) は f_1, \dots, f_s の共通ゼロ点でない

1.の場合、 f が f_1, \dots, f_s が共通零点で消えるから、

$f(a_1, \dots, a_n) = 0$ となり、 $(a_1, \dots, a_n, a_{n+1})$ では

$$1 - yf = 1 - a_{n+1}f(a_1, \dots, a_n) \neq 0$$



$$(a_1, \dots, a_n, a_{n+1}) \notin \mathbf{V}(\tilde{I})$$

2.の場合はある*i*に対して $f_i(a_1, \dots, a_n) \neq 0$

関数*f*を*n*+1変数の関数と捉えたと,

$$f_i(a_1, \dots, a_n, a_{n+1}) \neq 0$$



$$(a_1, \dots, a_n, a_{n+1}) \notin \mathbf{V}(\tilde{I})$$

$(a_1, \dots, a_n, a_{n+1})$ は任意なので $\mathbf{V}(\tilde{I}) = \emptyset$

弱形の零点定理より $1 \in \tilde{I}$

つまり, $1 = \sum_{i=1}^s p_i(x_1, \dots, x_n, y) f_i + q(x_1, \dots, x_n, y)(1 - yf)$

となるような多項式 $p_i, q \in k[x_1, \dots, x_n, y]$ が存在する。

ここで, $y = 1/f = 1/f(x_1, \dots, x_n)$ とおくと

$$1 = \sum_{i=1}^s p_i \left(x_1, \dots, x_n, \frac{1}{f(x_1, \dots, x_n)} \right) f_i$$

分母を打ち消すような十分大きな f^m を両辺にかけると

$$f^m = \sum_{i=1}^s A_i f_i \quad \square$$

定理の証明に必要な演習問題 の(多分合っている)回答

演習問題3~5

(補足) 斉次多項式

- 次数を揃えた多項式

$$h_N(x_1, \dots, x_n) = \sum_{m_1 + \dots + m_n = N} \alpha_{m_1, \dots, m_n} x_1^{m_1} x_2^{m_2} \dots x_n^{m_n}$$

例 $h_2(x_1, x_2, x_3) = x_1^2 + 3x_2x_3 - 2x_3^2$

演習問題3

全次数 N の多項式 $f_1(x_1, \dots, x_n)$



座標変換

$$\tilde{f}_1 = c(a_2, \dots, a_n) \tilde{x}_1^N + (\tilde{x}_1 \text{ degree less than } N)$$

この時 $c(a_2, \dots, a_n) \neq 0$

復習: 全次数

$$x^\alpha = x_1^{\alpha_1} x_2^{\alpha_2} \cdots x_n^{\alpha_n}$$

$$|\alpha| = \alpha_1 + \alpha_2 + \cdots + \alpha_n$$

a.

f を斉次多項式として表すと

$$f(x_1, \dots, x_n) = h_N(x_1, \dots, x_n) + \dots + h_0(x_1, \dots, x_n)$$

座標変換(1)により

$$\tilde{f} = c(a_2, \dots, a_n)\tilde{x}_1^N + (\tilde{x}_1 \text{ degree less than } N)$$

この時, 以下を示せ

$$c(a_2, \dots, a_n) = h_N(1, a_2, \dots, a_n)$$

証明

今、 $h_N(x_1, \dots, x_n)$ を以下の形に表す。

$$h_N(x_1, \dots, x_n) = \sum_{m_1 + \dots + m_n = N} \alpha_{m_1, \dots, m_n} x_1^{m_1} x_2^{m_2} \dots x_n^{m_n}$$

座標変換(1)を代入すると

$$\begin{aligned} &= \sum_{m_1 + \dots + m_n = N} \alpha_{m_1, \dots, m_n} \tilde{x}^{m_1} (\tilde{x}_2 + a_2 \tilde{x}_1)^{m_2} \dots (\tilde{x}_n + a_n \tilde{x}_1)^{m_n} \\ &= \tilde{x}_1^N \sum \alpha_{m_1, \dots, m_n} a_2^{m_2} \dots a_n^{m_n} + (\tilde{x}_1 \text{ degree less than } N) \\ &= \tilde{x}_1^N h(1, a_2, \dots, a_n) + (\tilde{x}_1 \text{ degree less than } N) \quad \square \\ &\quad \parallel \\ &\quad c(a_2, \dots, a_n) \end{aligned}$$

b.

斉次多項式 $h(x_1, \dots, x_n) \in k[x_1, \dots, x_n]$ が零多項式であることと, $h(1, x_2, \dots, x_n) \in k[x_2, \dots, x_n]$ が零多項式であることは同値である.

[証明]

h_m を x_1 に関して以下のように書く

$$h_m(x_1, \dots, x_n) = x_1^m g_0(x_2, \dots, x_n) + x_1^{m-1} g_1(x_2, \dots, x_n) + \dots + x_1^0 g_m(x_2, \dots, x_n)$$

この時

$$h_m(1, x_2, \dots, x_n) = g_0(x_2, \dots, x_n) + g_1(x_2, \dots, x_n) + \dots + g_m(x_2, \dots, x_n)$$

ここで、 g_m は x_2, \dots, x_n に関して m 次の斉次多項式なので、 g_m と g_k の項は $m \neq k$ の場合同じ次数の項を含まない。

$$g_m(x_2, \dots, x_n) = \sum_{k_2 + \dots + k_n = m} \alpha_{k_2, \dots, k_n} x_2^{k_2} \dots x_n^{k_n}$$

よって $h_m(1, x_2, \dots, x_n)$ が零多項式になる時も、
 $h_m(x_1, x_2, \dots, x_n)$ が零多項式になる時も、 g が零
 多項式である。よって示された。 \square

相殺してしまいそうなパターン

$$h_m(x_1, \dots, x_n) = x_1^m g_0(x_2, \dots, x_n) + x_1^{m-1} g_1(x_2, \dots, x_n) + \dots + x_1^0 g_m(x_2, \dots, x_n)$$

$$h_m(1, x_2, \dots, x_n) = g_0(x_2, \dots, x_n) + g_1(x_2, \dots, x_n) + \dots + g_m(x_2, \dots, x_n)$$

$$\begin{array}{c} = \\ x_2 \end{array}$$

$$\begin{array}{c} = \\ -x_2 \end{array}$$

というパターンは起きないということ

c.

最初の仮定より, f_1 の全次数 N は1以上であると
仮定した. これより $h_N(x_1, \dots, x_n) \neq 0$

b.の結果から, 直ちに $c(a_2, \dots, a_n) \neq 0 \quad \square$

これは零関数でないという意味

bで示したこと

$h(x_1, \dots, x_n)$ is not zero poly $\Leftrightarrow h(1, x_2, \dots, x_n)$ is not zero poly

aで示したこと

$0 \neq h(1, a_2, \dots, a_n) = c(a_2, \dots, a_n)$

演習問題4

代数的閉体 k は無限体である

(証明)

仮に k は有限体であると仮定し、その全ての元を以下で表す(ここでは簡単のため二個で示すが、 N 個の場合でも全く証明は同じ)

$$k = \{a_1, a_2\}$$

(演習問題のヒントを使って)

関数 $f(x)$ を以下で定義する

$$f(x) = (x - a_1)(x - a_2) + 1 = x^2 - \underbrace{(a_1 + a_2)}_{\in k} x + \underbrace{a_1 a_2 + 1}_{\in k}$$

この関数の係数は k の元で、 k は代数的閉体と仮定したので $f(x)=0$ の解は k 上にあるはずである。

しかし、 f は全ての k の元において

$$f(a_1) = f(a_2) \neq 0$$

であるので、体 k 上にはなく、代数的閉体であるとした仮定に反する。

よって、代数的閉体は無限体。□

演習問題5

多項式 $f \in k[x_1, \dots, x_n]$ が座標変換 (1) によって移された多項式を $\tilde{f} \in k[\tilde{x}_1, \dots, \tilde{x}_n]$ と表す。

この時,

$$\tilde{I} = \{\tilde{f} : f \in I\}$$

が $k[\tilde{x}_1, \dots, \tilde{x}_n]$ のイデアルとなることを示せ。

復習：イデアルの条件（§ 1参照）

$$(i) \ 0 \in \tilde{I}$$

$$(ii) \ \tilde{f}, \tilde{g} \in \tilde{I} \rightarrow \tilde{f} + \tilde{g} \in \tilde{I}$$

$$(iii) \ \tilde{f} \in \tilde{I} \wedge \tilde{h} \in k[\tilde{x}_1, \dots, \tilde{x}_n] \rightarrow \tilde{h}\tilde{f} \in \tilde{I}$$

(i)は自明. ここでは(ii) (iii)を示す.

変数変換の写像を T と表すと逆写像も定義でき
て

$$T \circ T^{-1} = 1$$

$$T \begin{cases} x_1 = \tilde{x}_1 \\ x_2 = \tilde{x}_2 + a_2 \tilde{x}_1 \\ \vdots \\ x_n = \tilde{x}_n + a_n \tilde{x}_1 \end{cases} \quad T^{-1} = \begin{cases} \tilde{x}_1 = x_1 \\ \tilde{x}_2 = x_2 - a_2 x_1 \\ \vdots \\ \tilde{x}_n = x_n - a_n x_1 \end{cases}$$

$$\tilde{f}, \tilde{g} \in \tilde{I} \quad T^{-1}(\tilde{f} + \tilde{g}) = f + g \in I$$

$$\tilde{f} + \tilde{g} = T(f + g) \in \tilde{I}$$

これより(ii)が成立することが示された。

(iii)を示す.

$$\tilde{h} \in k[\tilde{x}_1, \dots, \tilde{x}_n] \quad \tilde{f} \in \tilde{I}$$

とした時, T の逆写像の操作を見れば,

$$T^{-1}(\tilde{h}) \in k[x_1, \dots, x_n]$$

は明らかである.

$$T^{-1}(\tilde{h}\tilde{f}) = T^{-1}(\tilde{h})f \in I$$

これから, $\tilde{h}\tilde{f} \in \tilde{I}$

これで(iii)が示された. \square